

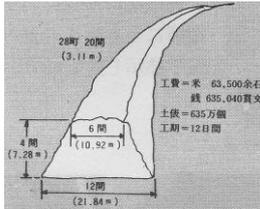
甲状腺外科草子 48

包囲された城：備中高松

杉野 圭三

歴史の大転換点となる場所の中でも、秀吉の「中国大返し」は大きな謎を含んでいる。天正 10(1582)年 5 月「中国攻め」を開始した秀吉軍は、この地に堤防を築き高松城を孤立させた。この堤防は堤底 22m、上幅 11m、高さ 7mの規模であることが検証され、秀吉は土俵 1 俵につき米 1 升と銭 100 文を支払い、わずか 12 日間で工事を完成させた。この工事全体の費用は、計銭 63 万 5040 貫文、米 6 万 3504 石と言われている。

この水攻めは黒田官兵衛の策とされているが、これだけの大量の米と銭を用意したのは、裏方に徹した弟の秀長達であろう。秀吉の出世の要因は軍師竹中半兵衛、黒田官兵衛以上に経済面で支えた秀長の力量が大きく、この備中高松の戦いからも窺うことができる。



築堤規模



高松城布陣図



(林信男氏撮影)

この地は水が溜まりやすい地形であり、川の氾濫などで様相が一変する。1985年6月の洪水で高松城址以外は湖の様に水没している。

某年秋、この地を訪れた。岡山駅から JR 吉備線(桃太郎線)で備中高松まで約 20 分、駅から徒歩で 10 分ぐらいの距離であるが、残暑の厳しさには参った！城址には資料館があり、貴重なパンフレットや資料が展示されていた。



布陣図立体模型

清水宗治像(備前焼)

公園内に城の痕跡はなく、ただ広い野原と蓮池があり、低い灌木と芒などに覆われていた。三の丸跡地から奥に進むと二の丸、本丸跡地へ続き、宗治公の首塚、胴塚がある。



三の丸跡地



城址公園



本丸への蓮池



宗治公供養塔

6月2日の「本能寺の変」の後、6月4日に城主の清水宗治は城兵 5000 名の命と主家(毛利)の安泰を条件に切腹、開城し、世に名高い「中国大返し」が始まる。

秀吉軍の情報管理、外交手腕、退却・山崎の戦い(天王山)への進軍の見事さから未だに議論が尽きない。

清水宗治は湖上の舟で切腹、辞世の句は「浮世をば今こそ渡れ武士(もののふ)の名を高松の苔に残して」

敵味方から尊敬された名将の地である。

この辞世の後に詠むのは恥ずかしいが、一句。城址を囲む芒(すすき)と兵(つわもの)とこれでも随分悩んだが、宗治公に大笑いされそうである。如何に添削しても凡人かな？

参考：高松城址公園資料館、高松城址保興会。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022年10月26日